



2023年（令和5年）

9月号（No. 940）

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

創立120周年記念事業

グレート・ヒマラヤ・トラバース／ステージⅢ（下）

テシ・ラブチャ・ラとティルマンの
コルを越えてランタン溪谷へ

飯田邦幸

GHTステージⅢの後半部は、ロールワリンからランタン・ヒマールへ。2つの峠越えの難所を突破し、たどり着いた所は、世界一美しいと言われる緑の谷だった。後半部担当の飯田隊員のレポート。

今回の第3回GHTで私にとつていちばん印象に残っているのが、5月20日の出来事だ。この日は今回の核心部とも言えるティルマンのコル（5308m）を通過する日だった。1949年、イギリスの探検家H・W・ティルマンがシシヤパンマの位置を調べに入り、ランタン谷のコルを初めて越えてカトマンズに戻ったところから「テ

5月20日西側氷河5100m付近
ティルマンのコルに続く氷河の
隣の氷河4706m

8時、先行するガイドのラムカ
ジとアシスタント・ガイドのラク
パ、続いてポーターたちが出発す

目次

テシ・ラブチャ・ラとティルマンのコル を越えてランタン溪谷へ……………	1
第7回「山の日」全国大会おきなわ 2023を本島北部で開催……………	4
山の名著再読……………	6
凍土の森を貫く	
阿寒富士山麓の道路新設計画……	8
連載■ご当地アルプス登山案内	
④槍戸アルプス……………	9
④東温アルプス……………	10
東西南北……………	12
活動報告 総務委員会……………	13
新入会員……………	13
支部だより 越後支部……………	14
図書紹介……………	14
会務報告……………	17
ルーム日誌……………	17
会員異動……………	17
INFORMATION……………	17
編集後記……………	19

▶日本山岳会事務局（含図書室）取扱時間
月～金……………10～20時
第1、第3、第5土曜日……10～18時
第2、第4土曜日……………閉室

る。8時20分、ガイドのラクダン、重廣隊長、吉井隊員、飯田の4名も出発、雪の急な斜面を登る。10時55分、コルの手前標高5406mの所でラムカジたちガイドとポーター全員が私たちを待っていた。ラムカジが「上部へのルートがない」と言う。重廣隊長がガミミン・インリーチの画面を見せて、登った氷河を1本間違えていることを伝えた。重廣隊長は2日前からおかしいと思っていたが、ラムカジが「逆方向からバスを越えた経験がある」と言っていたので、任せていたと言う。現在の標高はティルマンのコルを1000m近く超えているのだ。分岐まで戻り、正しい氷河に入ることにする。11時20分、下山開始。

なぜこのようなことになったのか、4月24日から順を追って報告する。

4月24日タイム 25日パルチェム・ツォ

7時30分、中村三佳隊員は別れを惜しみつつガイドに付き添われてナムチェ・バザールに下山していった。ここから重廣隊長と合流するまで、吉井隊員と飯田の2人で進むことになる。

歩き出して30分、細かい雪が舞い始め、1時間後には本格的な降雪。風も冷たい。雪のため何も見えず、ひたすら歩きバルチェム・ツォの避難小屋に入る。翌日、雪はやんだが登山道が埋まり、ラムカジがルート・ファインディングに苦労していた。10時ごろまたも雪が降り始めたが、なんとかテシ・

●行程図は前号、8月号7ページを参照してください。



ティルマンのコルに向かう一行。ここから右方向にルートをとって進む

ラブチャ・キャンプに着いた（実際は400m手前の5200m付近だった）。

26日テシ・ラブチャ・キャンプ→テシ・ラブチャ・ラ→27日グレイシャー・キャンプ→カブグ

朝、ラムカジから相談があり、ポーターの1人が高度障害で動けなくなつたと言う。「ナイケ（ポーター頭）と若いポーター1名を付き添わせて、ターメに下山させることにしたい」とのこと。もちろん了承した。

今日はコース中盤の難所テシ・ラブチャ・ラを通過しなければならぬ。「ラ」はネパール語で峠の

意味。ラムカジが張ったフィックスロープにアッセンダーを使つて登るなどして、13時50分、テシ・ラブチャ・ラ着。峠の直下にクレバスがあり慎重に下る。

翌日、出発して2ピッチ目もフィックスロープを使用して下る。途中、宇宙船のような避難小屋があった。これが昨日宿泊予定だったグレイシャー・キャンプだった。そこから、ひたすら下つてカブグに到着した。

28日カブグ→ナ→29日ドカン→30日シミガオン

雪が付いて歩きにくいモレーンを昨日と同じように登り、下り、トラバースを繰り返す。氷河湖の監視所があり、決壊による水害を警戒していることが分かる。ナに到着。翌朝、「高山病で下山したポーターたちのその後の容態が心配なので、連絡が取れる場所に早く下山したい」とラムカジが言う。ドカンでは通信不能。30日、しつとりとした緑の中を下り、シミガオンに到着。先行したラムカジが待っていた。

高山病のポーターは回復して元気になったと言う。ナイケともう

1人の若いポーターは病人を降ろした後、山に残したテントと荷物を回収して私たちを追いかけてきている、とのこと。後2時間くらいでここに着くと言う。本当だろうか、あまりに早い。15時35分、外からポーターたちの歓声が聞こえた。部屋の外に出てみると、ナイケと若いポーターの到着だった。

5月1日休養日→2日コンガル、重廣隊長と合流

まる1日休養した翌日、快調に飛ばして昼前にコンガルに到着。重廣隊長がカトマンズからジープで戻ってきた。

3日コンガル→ヤルサ→4日チリンカ

歩き始めてすぐ、集落の外れの橋を渡った直後から登りが始まり、約600mの石段を一気に登ってヤルサに到着。翌日はスタート直後の8時に雨具を着用。この日は終日雨。夕方チリンカに到着。

5日ビグ村→6日テワ→7日ジャグマデイ

テワとジャグマデイの間にはティンサン・パスという峠があり、

そこを過ぎるとすぐに山の中に入る。そこから長いトラバースの道が始まる。落ちたら500m以上あるだろう。緊張して歩く。下り、登り、トラバースを繰り返してジャグマデイに到着。

8日ラストリゾット→9日リストイ→10日カルカ→11日キャンジン→12日テンバタン→13日カルカ→14日パンチポカリ

ジャグマデイからラストリゾットまでは1200m下る。途中、地図上の道から外れて一気に下の自動車道に降りていき、ラストリゾットに到着。これ以降リストイ、カルカ、キャンジン、テンバタン、カルカはすべてテント泊で、パンチポカリのみがバツティ（宿泊施設）だった。降雪の中、パンチポカリ到着。

15日パンチポカリ休養日→16日インターメディアリー・キャンプの少し下→17日ティンポカリ

パンチポカリは5つ（パンチ）の池（ポカリ）の意味で、その名のおり5つの池がある。ティンは3つの意味で、ティンポカリにも3つの池がある。

18日ハイキャンプ・サウス西側の氷河上4700m付近へ19日西側氷河の5100m付近

一昨日からの雪で、深い所は腰ぐらいのラッセルになる。12時ごろ、上の方から声が聞こえてくる。道を間違えたかもしれないと言う。12時50分、ラムカジが疲れた表情で降りてきた。今日はここにテントを張って、明日、正しいルートを登り返すと言う。

翌19日、昨日間違えた分岐まで戻り氷河に降りる。実はこのときまた間違えて、1本西側の氷河に取り付いていたのだ。雪の積もったモレーンをひたすら登る。10



ランタン村を一気に飲み込んだ土砂崩れの跡。所々に追悼のケルンが立つ

時45分、ヘルメット、ハーネス、アイゼンを装着。15時50分、キャンプサイトを設営。明日のティルマンの科尔越えに備える。

この「明日のティルマンの科尔越え」というのが、冒頭に紹介した部分である。なぜルートを間違えたのか。ガイドのラムカジには、ランタン溪谷からティルマンの科尔を越えた経験があり、それを信頼していたこと。ルートが違うと思っても無線機を携行していなかったため、先行するラムカジに伝えられなかったこと。最大の理由は5万図を持って行かなかったことである。私たちが携行した地図は12万5000分の1だった。氷河の複雑な地形を把握できなかったことにある（20日の行動は冒頭を参照）。

21日ティルマンの科尔に続く氷河の隣の氷河4706mへランシサ・カルカの手前4150m

「今日は何が何でもティルマンの科尔を越えて、雪のない所にテントを張りたい」とラムカジ。食料と燃料が足りないのだと言う。そのため2名のスタッフを先行させ、明日泊まる予定の集落で食料と燃

料を調達してくることにした。

6時45分出発。モレーンを登る。大小の石、砂、雪のミックスで登りづらい。9時15分、アイゼン装着。アイゼンを履くと重廣隊長の登る速度が急に上がった。私たちもついていくのがやっとだ。1時間後、通常の数度に戻った。理由を聞くと、真上に懸垂氷河があったためだと言う。

13時5分、ティルマンの科尔に到着。ガスで何も見えない。ともかく下り始める。15時、雨具装着。雪というよりもアラレが全身を打つ。モレーンの下りになり15時50分、アイゼンを脱ぐ。

19時15分、ヘッドランプを点灯。ひたすら下る。21時45分、先行していたラムカジが迎えに来た。ポーターたち6名も来てくれた。流れの強い川を彼らに支えられて徒渉、ここからキャンプはまだ先だと言う。重廣隊長と吉井隊員・飯田の2つに分け、我々が先行することになった。午前1時5分、キャンプに到着。重廣隊長の到着は午前4時だった。

22日キャンジン・ゴンパへ23日ラマホテルへ24日シャブルベシ

夜が明けてみると、そこは絶景だった。四方を山に囲まれ、緑豊かな風景は、前日までの苛酷な氷河とは別物だった。世界で最も美しいと言われるランタン溪谷に入ったのだ。出発して早々、先行させたスタッフが食料を調達して戻った。買ってきたチャパティとアル・タルカリ（ジャガイモのおかず）を配ってくれた。うまい。

ラムカジは宿の手配をするため先行し、私たちはゆつくりと右岸を下る。

14時ごろ、右岸から左岸へ道を横切るような広大な土砂崩れの跡が現われた。重廣隊長によれば、2015年の地震で発生した土砂崩れの跡で、この下にランタン村と350人が埋もれたままになっていると言う。これまでに通過した谷の兩岸にも随所に土砂崩れの跡があり、地震の大きさと被害の甚大さを物語っていた。

15時、ラマホテルに到着。久しぶりのベッドでゆつくり過ごす。以後、ランタン溪谷の美しさを満喫しつつ下り、5月24日14時35分、シャブルベシに到着。今回の踏査を終了した。

（会員番号122007）

REPORT

第7回「山の日」全国大会おきなわ2023を本島北部で開催

理事 久保田賢次

8月10日・11日の両日、第7回「山の日」全国大会おきなわ2023の記念式典や関連行事が行なわれた。全国持ち回りで開かれていた催しで、今夏は「山を知り、山に感謝し、山を楽しむ」自然豊かな南の島、沖縄から未来へ」をテーマ

に、沖縄県北部の国頭、東、大宜味^{きみ}の3村と、西表島^{いりおもて}が属する竹富町が開催地となった。いずれも亜熱帯照葉樹林が広がり生物多様性に富んでいるとして、21年に世界自然遺産に登録された地域でもある。

大宜見村で記念式典を開催

10日は各地でトレッキング、セラピー・ツアー、トレイル・ウォーク、カメラ体験などが行なわれ、国頭村のやんばる国立公園「大石林山」ではレセプションが開かれた。

県内外から10000人を超える人たちが集まって、大宜味中学校体育館を会場に行なわれた11日の記念式典は、琉球王朝時代の木遣歌「国頭サバクイ」

や、季節の情景を詠った口説に合わせて優雅に舞う若衆踊り「四季口説」などの伝統芸能で幕を開けた。

山の日恒例の「山鐘」に続き、務台俊介・「山の日」議員連盟事務局長が台風被害へのお見舞いの言葉も含めて開会を宣言、大会会長の玉城デニー・沖縄県知事が、山原^{やんばる}の木材が伐り出されて、はるばる首里城まで運ばれたことなど、自然と共生しながらの歴史について語った。

続いて友寄景善・大宜味村長、知花靖・国頭村長、當山全伸・東村長、前泊正人・竹富町長らが、それぞれの地域の子どもたちとの微笑ましい掛け合いスタイルで、自然や観光の魅力をアピールし、谷垣禎一・全国山の日協議会会長のビデオ祝辞、「山はふるさと」の合唱、国定勇人・環境大臣政務官、青山豊久・林野庁長官の来賓挨拶と進んだ。

メイン・アトラクションは、平田大一さん演出の「おきなわ芸能絵巻『ぐすじさびら!』山の祝祭り」という劇が盛大に繰り広げられた。神々や精霊、多様な生き物が集まり年に一度執り行な



開催4町村の学生たちによる活動発表のコーナー

われる幻の宴の場に、いつしか参加できなくなってしまうという人間が迷い込んでしまうというストーリーで、会場の参加者らも一体となつて盛り上がった。

続くリレー・セレモニーでは、玉城デニー知事から、来夏の開催地である東京都の中村倫治・副知事に「山の日」が引き継がれ、橋本岳副会長の「来年の今日この日、多くの方々と東京都でお会いできることを期待します」という開会の言葉で締めくくられた。

第2部は多彩な記念行事を展開

第2部の記念行事は、世界自然遺産大使でもある4人組バンド



沖縄らしい華やかな伝統芸能で記念式典の幕が開けた



歓迎フェスティバルが開かれた東村つつじエコパーク

「H.Y」によるライブに始まり、同じく世界自然遺産大使で俳優の比嘉愛未さん、山の日アンバサダーの四角友里さんらによるゲストトークが行なわれ、四角さんは「森のエネルギーが強く、得るものが多い。山から海が見えるのも素晴らしい」と沖縄の山々の印象を語った。

学生による発表コーナーでは、辺土名高校の生徒たちが、全国高校生自然環境サミットの話を、東村の有銘小学校の生徒たちはヒルギ観察の成果を、国頭村の安田小学校の生徒は、田植えや巣箱の取り付けなどの活動を紹介、西表島の小中学生でつくる西表ヤマネコ

クラブは、パトロールなどの様子を發表した。

後半は西表島出身のシンガーソングライター・池田卓さん、世界自然遺産記念切手のデザインや有名ブランドとのコラボも手掛けるpocket104（ぽっけいちまるよん）さん、琉球藍染色家の真栄城興和さんらも加わり、にぎやかな語りや歌が続いた。

「おきなわ百低山フォト・グランプリ」の入賞作品も發表され、インスタグラムに投稿されたたくさん写真の中から、それぞれのゲストが選んだ特別賞の選定理由が語られた。また、沖縄山岳会の方々の協力で作成された『おきなわ百



ブース出展した沖縄県山岳・スポーツクライミング連盟の皆さん

低山ガイドブック』も披露された。

東村では歓迎フェスティバルが

同日、東村のつつじエコパークでは、歓迎フェスティバルが開催。ラジオの生放送や式典、ゲストらによるトークショーなどのステージ・イベントのほか、火起こしや草あみ体験、ペーパークラフトワーク、福地ダムでのカヌーや遊覧船による自然体験なども人気を集め、約4800人が参加した。各ブースでは特産品、工芸品の販売やスポンサーによるPRなども行なわれたが、登山と関連の深い内容としては、沖縄県山岳・スポーツクライミング連盟の人たちがブース出展し、山々の魅力や事故対策などについて伝えた。

沖縄での大会が決まったところ、関係者からは「沖縄には高い山がない」など遠慮がちな声も聞かれたが、必ずしも標高や登山対象として有名な山の存在が重要なのではなく、新たな視点からの山の恩恵への感謝のあり方が伝わった催しとなったように感じる。地域を挙げて、さらに家族ぐるみの参加者も多く、子どもたちが主体の活動報告や熱気あふれるアトラクシ

ョンを通じて、随所に沖縄らしさとパワーが發揮されたことが強く印象に残った。

来夏は東京都で開催

山の日帽は東京都に引き継がれた。東京都のホームページにも「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝するという、山の日」の浸透を図り、山に関する歴史・文化の継承、環境保全、観光振興、健康増進、山岳遭難や自然災害への対応などの様々な課題の解決や、山の未来のあり方について考える機会とすることを目的とする」という旨が記されている。

また、小池百合子・東京都知事は、決定に先立つ開催地立候補の際の記者会見で、「生物多様性地域戦略を改定し、将来にわたり生物多様性の恵みを受け続ける都市を目指している。この大会をきっかけとして、戦略の趣旨や取り組みを広く発信したい」とコメントしている。

私たち日本山岳会としても、国民の祝日「山の日」がさらに浸透していくために協力をしていかなければ、と思う。

（「山の日」事業委員会委員長）

新連載 ■ 文庫本でも楽しめる

山の名著再読

(1)『日本百名山』(深田久弥著・新潮社)

荒井正人

『日本百名山』は、来年で発行されてから60年となる。発行翌年に読売文学賞を受賞し、その後文庫化もされ、今も多くの山好きに読まれていることは、驚くべきことである。

改めておさらいをしておく、『日本百名山』は、〈深田久弥が登った山の中から〉彼なりの一定の名山の要件「品格」「歴史」「個性」と付帯的条件としての「標高1500m以上」を満たす山を選び、それぞれについて、その山の成り立ちや自然、山名の由来、信仰や歴史、詠まれた詩歌などに触れながら、紀行的な文章も加えて紹介し



昭和39(1964)年初版発行

たものである。山をテーマにした上質なエッセイであり、文学作品である。北海道と東北の4座(阿寒岳、旭岳、岩手山、早池峰山)は、ほかの山に比べて文章量が多い。それは詩歌や歴史が豊かに書かれていることによる。山の文学者作家深田久弥らしいところだ。

そして、これはあくまでも出版時の深田百名山と言うべきもので、後記には「私の眼は神の如く公平ではない」「実際に登っていないという不公平な理由で除外したことは、それらの山に対して甚だ申しわけない」「今後再版の機会があったら、若干の山の差し替えをするつもりである」と書かれている。

発行の7年後に久弥は茅ヶ岳で帰らぬ人となってしまいが、その間に、たとえば後記で触れた北海道のニペソツ山などにも登っていい、もう少し時間があつたなら、『新版百名山』が読めたのかもしれない。

ない。でも、こう考えたらどうか。その部分は、たとえば後記に列挙されている山などに登った私たちが、この山は百名山に選ばれたのだろうかかと想像し、自分なりの百名山を描けば良いのだ、と。筆者は久弥が亡くなった年から山登りを始めたが、『日本百名山』はことあるごとに読み、のちに、後記に出てくる山に登っては、久弥ならどのように書いたのだろうかと思いを巡らせるのが楽しみなつた。人それぞれの百名山があつて良い。その指針となる著作があることに感謝すべきである。

『日本百名山』を著わしたとき、久弥は50年の登山歴があり、数百の山に登っている。当時すでに登山者が多くなつていた一部の山を除き、その時代の山登りがどれほど大変であつたかを考えると、これはすごいことである。その中から選んだ百名山である。パイオニアワークと言つてもよいと思う。

新しいルートができたり、車で山頂近くまで行けるようになって、久弥が登ったときの苦勞もなく山頂に立てる山も多くなつた。テレビの影響もあつて、百名山全ての山頂に立つことを目標にする人も

多い。山登りは百人百様であるから、全山登頂を目指すことも良いだろう。それでも、著者の深田久弥を知らない人が多いと聞くと悲しくなる。久弥生誕120年の今年、再読してみたいものである。

年齢とともに山の経験が豊かになつても、読み返せばいつも発見がある。さらに、深田久弥という人物への興味が増して、多くの著作も読むようになった。感じるのは、本当に久弥は山が好きだつた。登ることばかりでなく、眺めることも、そして書くことも、ということだ。数百の山に登つたと書いたが、本当に多くの紀行、エッセイを残している。その積み重ねが『日本百名山』として結実したのである。『わが山』『山岳展望』『瀟洒なる自然』など、文庫本になっているものもあるが、『日本百名山』をより深く読むために、また久弥をよりよく知るために、ぜひとも大森久雄氏監修のヤマケイ文庫『深田久弥選集 百名山紀行』(上・下)をお勧めしたい。

文庫版は、新潮文庫(1978年初版発行、税込み1100円)で読むことができる。

(図書委員会委員)

(2)『北ハッ彷徨』(山口耀久著・創文社)

神長幹雄

山口耀久あきひささんの代表作『北ハッ彷徨』は、戦後の山岳文学の最高傑作とまで称されたものだ。初版は1960年、創文社から「アルプ選書」の1冊として出版されたが、その初出のほとんどが50年代後半、

山の文芸誌『アルプ』と、山口さんが代表を務めていた獨標登高会どくひょうたかこうかいの会報に発表されたものだった。

山口さんが頻繁に八ヶ岳へ通っていたころの思いを綴ったもので、「岳へのいざない」や「四季」は山の紹介、「雪と風の日記」や「北ハッ日記」は記録風の読み物、「雨池」や「落葉松峠」「冬の森」などは紀行、本のタイトルともなった「北ハッ彷徨」は随想、そして、最後の「富士見高原の思い出」は書き下ろしの療養記である。当時の山口さんは30代の前半で、おおらかな北

ハッの風情と相まってその初々しい感性が随所で発揮され、みずみずしい筆致で描かれていた。その表現力は見事と言うほかに、著者の北ハッへの想いの深さに魅了されてしまう。

やがて何度も版を重ねて読み継がれてきたこの名著も、かなり長い間品切れの状態が続いていた。その『北ハッ彷徨』が「定本」として、平凡社から復刊されたのは2001年10月のこと。さらに続編と言われる『八ヶ岳挽歌』がその2ヶ月後、ほぼ同時に出版された。やつと「彷徨」が復刊されたうえに新刊の「挽歌」が出版されたのだから、遅筆な山口さんを知る私たちは心底驚かされた。この間実に40年の歳月を要している。

60年代以降の八ヶ岳は大きく変貌しつつあった。「開発」の名のもとにシラビソやコメツガの森が消え、自動車道路やロープウェイが出現して、周囲の様相が一変してしまっただ。そうした現実と直面して、山口さんの筆はピタッと止まってしまったのだらう。

その間、私は何度も山口さんの家に伺っている。原稿の依頼はいつも断られていたが、どんなときも訪問を喜んでくれて、山の会話が弾んで毎回楽しいひとときを過ごさせてもらった。諦めずに通いつけてやつと実現した企画が、30年ぶりに北ハッの雨池を再訪してもらおうという『山と溪谷』誌の撮影行だった。水を満々と湛えた雨池の景観や鮮やかな紅葉が実に美しく、雑誌の中の山口さんとても楽しそうだった。その後に執筆された紀行文がまた生き生きとした描写ですばらしく、今でも忘れられない記事の一つになっている。

このときの紀行文が母体となつて、最終章の原稿がやつと脱稿したのは、2001年の6月のことだという。何度も推敲を重ね、それでも満足せず、ときに発表をためらいながら、難産の末にやつと完成した『八ヶ岳挽歌』だった。酒が長い年月を経て発酵、醸成してはじめて良酒となるように、長期間にわたる推敲に相応の時間が必要だったのかもしれない。

いかにも表現に厳しく妥協を許さない山口さんらしい話だが、執筆の際、いつも気に留めていたの

が、山の紀行文についてだった。初期の紀行文は記録を綴るだけで十分に新鮮な感動を与えていたというが、『北ハッ彷徨』が書かれた50年代はすでに未知の部分がそう多くはなかった。未知の要素がなくなり、山そのものが変わってしまった。感動の度合いが薄れるのも当然だろう。それが文章の質の低下にもなりかねない。その点を危惧して、山口さんは文章に新鮮な驚きと感動、若やいだ感性を著わそうとしていた。しかも通常は年齢とともに感性も鈍麻し、文章も類型的にならざるを得ない。なんとかそこを打開しようと、五感を働かせて、自然との交感を深め、思索し、表現しようとしていたのだ。

それが『北ハッ彷徨』であり『八ヶ岳挽歌』だと思う。しなやかでありながら鋭い感性と、時の経過に褪せない「青春の書」として、現在も輝きを放ち続けている。世代を超えて支持されて60年、若い会員たちに読み継がれてほしいと切に願うのである。

文庫版は、平凡社ライブラリー(2008年初版発行、税込み1430円)で読むことができる。

(図書館委員会委員長)

POSING PROBLEM

凍土の森を貫く

阿寒富士山麓の道路新設計画

阿寒湖一帯は、雄阿寒岳（1370 m）や雌阿寒岳（1499 m）などの火山、マリモで有名な阿寒湖ほかオンネトーなどの山間の湖、さらには一帯を広く覆い尽くす亜寒帯針葉樹林の北方的景観がすばらしい所だ。雌阿寒岳の南側にそびえる阿寒富士（1476 m）の西麓に、オンネトー付近から道路の新設が計画されている。

火山噴火予知連絡会によるランクBの活火山である雌阿寒岳の、噴火災害時における避難路を新設

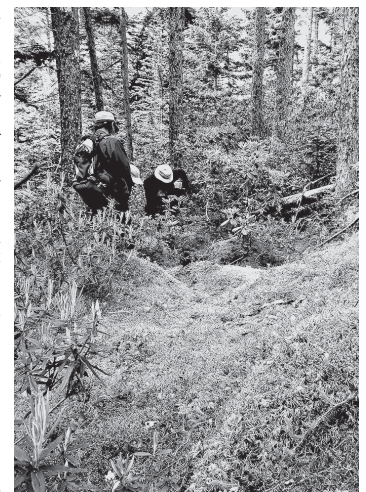
火山噴火予知連絡会によるランクBの活火山である雌阿寒岳の、噴火災害時における避難路を新設

清水長正

するというのが目的だそう。場所、オンネトーから流れ出る螺湾川沿いで、現在は未舗装の道道1車道が通じている。この現道にほぼ並行するように、森林を30×40 m幅にも伐り開いて、2車道の舗装道路を4・4 km新設するというもの。うちオンネトー寄りの1・2 km区間は、阿寒摩周国立公園の第2種特別区域を通り抜ける。

十勝自然保護協会・川内和博事務局長の案内により、今年6月に現地を訪ねてみた。阿寒富士の西麓は、ちょうど富士山麓の青木ヶ原樹海のような溶岩表面の凹凸に富んだ地形が広がっていて、一帯はトドマツとアカエゾマツからなる亜寒帯針葉樹林に覆われている。新設道路の計画路線は、螺湾川沿いの現道から50 mほど立ち入った森林内で、すでに計画路線の杭打ちがされていた。

標高620 mほどに設置された一部の工事計画用杭の近傍には、樹高25 m余、胸高直径30 cm以上も



アカエゾマツ林と林床のイソツツジ。地表はコケのマットに覆われ、地下は凍土

の立派なアカエゾマツがまとまって育つ樹林があった。なんと、この林床には高山植物のイソツツジやコケモモが見られ、地表は厚いコケのマットで覆われていた。地表部の温度はおおむね3℃以下で、コケの下は6月中旬でも部分的にまだ凍っていた。おそらく火山麓の溶岩に生じた風穴の現象による凍土で、それが2年以上の長期にわたって凍り続けるとすれば、永久凍土の可能性もあり得るだろう。

近傍では、ホソバミズゴケも認められ、これは凍土の融水の水分が育てているに違いない。ともかく、凍土上のミズゴケや高山植物アカエゾマツ林は、永久凍土上に成立するタイガにも似た貴重な森林と言えるのだ。

この森林を伐り開き、道路の法面開削や盛り土を施工すれば、凍土の融解による法面崩壊や盛り土の不等沈下が生じることが危惧される。事実、東大雪の十勝三股では、永久凍土の斜面をわずかに掘削しただけで、高さ1000 m以

上の崩壊が生じたことがあった。せめて現道の拡幅程度に計画変更できれば、貴重な森林が保全され、かつ凍土の融解による地表の環境変化も生じないと思われる。

そもそも、阿寒富士山麓の現道やこの新設道路予定地から2〜3 km隔てた北西側には国道241号があつて、阿寒湖―足寄（十勝）の主要道路となっている。災害時の避難路と称するのに、ここ数年おきに噴火を繰り返している雌阿寒岳寄りに、わざわざ森林を伐り開き長大な空間をつくって乾燥化させ、地下に凍土が潜むコケの森を消滅させるよりも、現道を整備することで避難対応できるのではないだろうか。環境省による許認可はまだ下りていないらしいが、この道路計画が葬り去られることを願うばかりである。



槍戸アルプス主稜線から見た剣山と次郎笈(左)

徳島県最高峰の剣山（1955m）を中心にして東西に連なる山並みは剣山山系と呼ばれ、立派な

が、そこから東に連なる山並みを「**槍戸**（やりど 鎗戸）アルプス」と呼ぶ。マインナーな山域だが、優美なブナ林が広がり、ツキノワグマも棲む秘境然とした山域だ。好んで通っていた筆者が、山域に名がない事実
に心を動かされ「**槍戸**アルプス」と命名したもの。江戸時代、一帯が

四国支部長 尾野益大

「鎗戸御林」と呼ばれ、今も通称、鎗戸山（一ノ森の南、1825m）があることが背景だ。

槍戸アルプスの初見は2009年12月発行のNPO法人・剣山クラブ創立5周年記念誌『剣の縁』の紹介記事だ。当時、会員の平井滋さんが、地域おこしを兼ねて槍戸アルプス周辺のガイドツアーを頻繁に催していた。現在はシカの食害で往時の面影はないが、静かな山やマイナーな山、ブナ林を好む人々の登高欲を満たしている。

【コースガイド】

マイカーが便利。2台用意して1台は下山口の勘場谷の出合の畷道と勘場林道分岐に置いておく。登山口は剣山スーパール道の剣山トンネルの東口にある。次郎笈の登山口でもあり、みやげ物店「山の家」や駐車場、トイレがある。

登山道は斜面に巻きぎみに主稜線を目指して行く。北側を振り向くと、徐々に山々が視界に入る。左から次郎笈、剣山、一ノ森、檜戸

山と並んで屏風のようなだ。

主稜線からは東方に進む。かつては背丈ほどのスズタケの猛烈なブッシュが行く手を阻んでいたが近年はほぼ全滅している。右奥に新九郎山が近づいて見えると小さなコブに上る。無数の枝を八方に伸ばした立派なブナがある。これも「千手観音ブナ」と名付けたが、残念ながら当時の面影はない。

踏み跡が徐々に薄くなるため油断は禁物。三角点を通過し、小さなアップダウンを繰り返すと不入山（1653m）。頂からの眺望は一段と優れている。エスケープ・ルートとして東北東の尾根を下ることが出来る。久井谷山（1536m）までの間は広大な尾根で、地形がやや屈曲していて迷いやすい。一帯はかつて、地元の人たちから「不入の窪」と恐れられたという。お留山として、あるいは迷いやすい山として伝えられたと考えられる。スズタケや下草が減って踏み跡が不明瞭になる一方、前方の目標物が見えるため迷う恐れが少ない。久井谷山からは尾根伝いに真東にルートを取り、折宇谷山（1653m）を目指す。

尾根が狭まってくるとひよっこ



り折宇谷山のてっぺんに出る。南側は切れ落ちていて高度感がありその分、景色が良い。振り返ると次郎笈や剣山が小さく見える。折宇谷山から南の尾根も、最近では使われていないが踏み跡があつて下ることが出来る。ここから樺田山(1606m)までは初夏ならゴヨウツツジ(シロヤシオ)の群生地があり、花を愛でる人が訪れる。



不入山付近から行く手に折宇谷山と権田山(左)を望む

折宇谷山から中内山(1650m)までは岩が点在した箇所がある。赤テープを見つけないが注意して歩く。中内山からは北の尾根にも下れるが、東に向かう。徳島で一番大きなブナだった「権田の夫婦ブナ」の夫の木は倒れて見る影もないが、妻の方は生きている。一つ小さなコブを越えると権田山(1606m)だ。この山はかつてブッシュに覆われ、倒木が横たわるだけだったが、きれいに刈り払われて三角点まで設置された。

権田山から2つ目の鞍部に下り、そこから登り始めると道は徐々に左に向かう。山にまっすぐ登らず、左に巻きぎみに進む感じた。やが

て広い台地に出る。見事なブナの森に包まれ、何時間でも過ごせる雰囲気だ。筆者が20代前半に四国のクマを探していた時代、クマらしき動物と遭遇したのは、先ほどの不入山と権田山だった。下り道は尾根の真ん中にあり、下部に行くほど傾斜がきつくなる。

車道に出たら、そのまま歩く。所々にショートカットする道もある。赤テープをよく見てほしい。

【コースタイム】 登山口(20分)主稜線(1時間)不入山(40分)久井谷山(1時間30分)折宇谷山(1時間30分)権田山(40分)林道(1時間)県道295号

【交通アクセス】 JR徳島駅から神山町川又まで国道438号で入り、そこから国道193号に入って那賀町沢谷へ。大きな橋の北詰から右の県道に曲がる。川成集落、次郎笈、山の家、四季美谷温泉方面だ。県道沿いの橋の横井林道起点となる勘場谷出合付近に車を止める。登山口は、ずっと西奥で合流する剣山スーパール林道を進み、剣山トンネルの東側にある。

【地図】 国土地理院2万5000分の1地形図「剣山」「北川」「阿波出原」

連載■ご当地アルプス登山案内42 東温アルプス

「東温アルプス」は、愛媛県西部の皿ヶ峰(1278m)から石墨山(1457m)まで続く、標高1000m余りの連嶺を指す。西端の皿ヶ峰は台地状の地形で、北側中腹に巨大な湿原「竜神平」を抱える山として登山者以外の人々にも有名だ。東端の石墨山が連嶺屈指の最高峰。石墨山の登山口近くにある唐岬の滝は、国民的な作家、夏目漱石が松山に住んでいた明治24(1891)年、観光で訪れていた「瀑五段 一段ごとの もみぢか



竜神平はブナ林に囲まれた盆地状の広大な湿原

な」と詠んだ俳句を残している。

縦走路は歩きごたえがあり、一気に歩き通す人は少ない。しかし、それだけに充実感がある。低山では滅多にお目にかかれない豊かなブナの森も味わい深い。

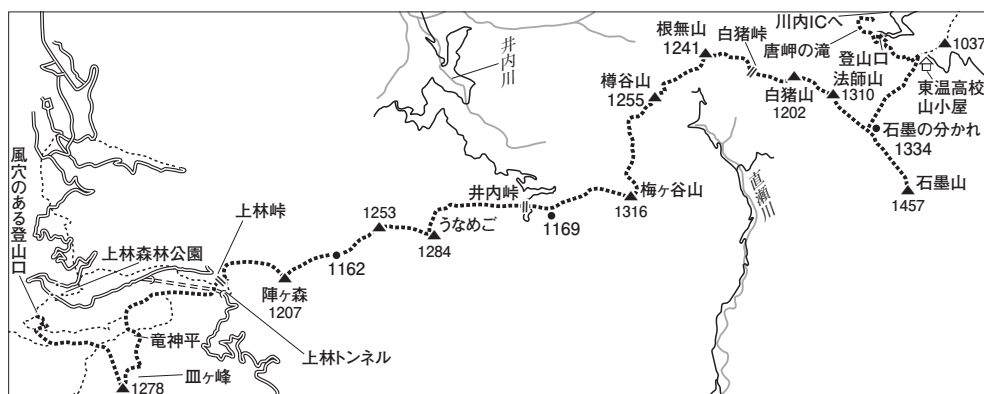
四国支部長 尾野益大

【コースガイド】

登山口は重信町から県道をたどる。棚田の間につづら折れの車道(かほで)が上がついて、上林峠の分岐から右に進むと、やがてトイレのある広い駐車場。風穴があり、夏でも涼しく、地元住民が石垣の囲いの中でヒマラヤに咲くブルーポピーを栽培している。

登山道は竜神平を目指し斜面の巻き道を行く。高度差約200mしかなく、ゆつくり歩ける。竜神平から皿ヶ峰へは反時計回りで登る。周辺は多くの植物に恵まれ、ブナの林がすばらしい。

縦走路は湿原北端に沿って整備されている。上林峠への下りは急な階段になっていて、転ばないよう注意したい。標高差は130



mもある。峠は車道が横切る。峠から次のピークの陣ヶ森(1207m)まで車道があるが、尾根の登山道を忠実にたどる。

狭い山頂には三角点とトイレが

あり、少し離れて電波塔も立つ。ただ、木々に覆われていて展望はない。小さなアップダウンを繰り返すと1253mのピークに至る。善神山との分岐点だ。さらに東進して「うなめご」(奥善神山、1284m)を目指す。

尾根道は上り下りが激しく気が抜けない。辺りにはブナなどの広葉樹林が多い。三角点が埋まっている「うなめご」の来歴は、地元にも伝わっていない。

「うなめご」を往復してから北に向かうが、かなりの急な下り坂だ。頼りの木も少ないため細心の注意を払って、滑らないようにしたい。再び緩やかな稜線の道に変わると井内峠に到着する。この辺りが全行程の中間点。峠は車道のトンネルの上部に位置し、登山道が上がつてきている。

辛抱強く一步一步登っていった先が梅ヶ谷山(1316m)。東温アルプス第2の高峰だ。東側に視界が開け、目標地の石墨山や西日本第一の高峰、石鎚山のビューポイントがある。ゆっくり休憩し息を整えたい。

高度を下げながら尾根上のいくつかの突起を越す。突起に立つた

びに、次の進路を確認してほしい。どの突起にも西方に下る尾根が張り出しているため、十分確認する必要がある。

樽谷山(1255m)を経て根無山(1241m)まで来ると、やがて白猪峠。峠から石墨山までの尾根道は、これまでと違ってやや細い。地図が示すとおり、断崖が尾根の直下や中腹に目立つ。また、白猪山(1202m)、法師山(1310m)のあたりはブナの木々が目を惹く。法師山は南側の巻き道を通りたい。

石墨の分かれは、唐岬の滝の入り口の近くから登って来た道との合流点。石墨山だけを指す登山者たちと出会うかもしれない。帰りはこの分岐から下るので覚えておく。ゴールの石墨山が指呼の間に迫る。

最後の20m余の坂を登り詰める、いよいよ石墨山。東方に視線をやると、胸のすくほど開け、この山が独立峰のように感じられる。石鎚山がかなり遠い。

下りは石墨の分かれから下る。途中、割石峠の近くに東温高校の小屋が立つ。登山口にはトイレ、そして漱石ゆかりの句碑がある。唐

岬の滝もぜひ見学したい。往復30分。

【コースタイム】皿ヶ峰の登山口(1時間30分)竜神平(30分)皿ヶ峰(20分)竜神平(1時間)上林峠(40分)陣ヶ森(1時間)うなめご(30分)井内峠(1時間30分)白猪峠(40分)石墨の分かれ(30分)石墨山(20分)石墨の分かれ(50分)登山口

【交通アクセス】マイカー2台で行きたい。松山自動車道の川内ICから国道11号、494号を経て

石墨山の登山口に1台を置いておく。もう1台で国道11号、県道23号を経て皿ヶ峰の登山口へ。

【地図】国土地理院2万5000分の1地形図「石墨山」



東温アルプス東部の白猪峠付近の稜線

東西南北

N

S

「御巢鷹山」の憂鬱へよ

滑志田 隆

はじめに

約40年前の夏、群馬県上野村奥地の国有林内に524人を乗せたB747型ジェット機が墜落炎上した。「8・12日航ジャンボ機御巢鷹山事故」である。生存者は4人。航空史上、今なお世界最大の単独機事故の汚名を記録する。

筆者は毎日新聞社会部記者として事故現場取材した経験があり、このたび社団法人・日本記者クラブの発注により当時の記憶を同会報第642号（2023年8月10日発行）に掲載した。これを読んだ山岳関係者の何人から新たな知見をいただくことができた。さらなる情報発掘を求め、本会報への趣旨転載を許可していただくことにした。

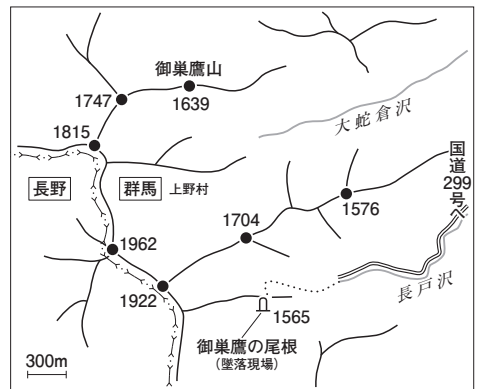
「御巢鷹」の誤報正せず／1・7kmの距離報告したが

8月の空を仰ぐたびに、あのすさまじい現場を思い起こす。赤茶けた地面に焦げ跡が広がり、航空機の残骸が散乱していた。毛布にくるまれた遺体が次々に空輸されていく。1985（昭和60）年8月15日朝、私は群馬県上野村の日航ジャンボ機墜落事故の現場にいた。死者520人、生存者4人。未曾有の事故発生から4日目。写真部員とともに急ごしらえのテントで寝泊まりした。

自分が今、どこにいるのかを正しく知ることが現場記者の第一の務めだが、その基本動作ができなかった。地図を持参したにもかかわらず、私はジャンボ機墜落の位置を「御巢鷹山」とする誤報を発し続けた。その修正に真摯に取り組まなかった。慙愧に堪えない。

8月12日午後6時12分、大阪行

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）



きの日航123便が羽田を離陸した。12分後に相模湾上空で衝撃があり、垂直尾翼を失った。同6時56分30秒、群馬・長野県境の山に墜落した。第1報は時事通信。マスコミの初動ぶりは朝日新聞社会部編「日航ジャンボ機墜落・朝日新聞の24時」に詳述されている。

私は13日深夜、毎日新聞の第2陣として群馬県上野村へ。翌14日未明から前線本部の高尾義彦キャップの指揮下に入った。村役場や県警の現地対策本部を取材し、どう峠で無線連絡を中継した。すでに「現場は御巢鷹山」の誤報が蔓延していた。15日早朝、本社へリで山中の事故現場に降り、先陣の萩尾信也記者と交代した。

「蜜柑の皮むき」禪問答

よくできたテントだった。萩尾君が自衛隊から提供されたビニールシートやロープと焼けた木々を組み合わせて作った。その技に感心した。機体の残骸の中を歩き、遺留物の模様などを記事にした。コックピット近くの焦げたカラマツの根元に、少女のひらがなの名が書かれた白い帽子が掛かっていた。暗転して消えた「夏休み」に胸が痛んだ。

その深夜、大型無線機の出力が急に改善し、社会部デスクと直接のやりとりが可能になった。「他社に気づかれないように行動し、現地の事故調（運輸省事故調査委員会）に当たれ」との指示だ。漆黒の闇の中、ヘッドランプだけを頼りにスゲノ沢上流部まで下りた。大きな闇の中に明るい部分があり、電動のこぎりの音が微かに響いていた。

そのころ、東京本社では運輸省詰め、の菊地卓哉記者らが「事故原因は後部圧力隔壁の破裂」の特報に取り組んでいた。「カクヘキ」という言葉を事故調に当て、「反応をうかがう」のが現場記者の私に

与えられた任務だった。

青シート張りの内側から出てきた事故調の2人組に食い下がった。やつと得たのは「蜜柑の皮むき」という禅問答のような答えだった。破裂してめくれ上がった状態を意味していたが、実は私は「隔壁」がいかなるものかを知らなかった。本社の勝又啓二郎デスクに報告。同氏は「ウラがとれたかもね」と言ったが、詳しい内容を教えてくれなかった。

ここはタカマガハラヤマ

夜が明けた。前日から再三、5万分の1の地形図「十国峠」と2万5000分の1「浜平」を参照していた。自分の位置が御巢鷹山のかなり南方であることを確信した。しかし、具体的にどこなのか不明だ。そこは地図の端だった。

現場を見に来た2人連れの森林組合の老人と遭遇した。「私たちはどこにいるのか。教えてください」と迫った。1人が「ここはタカマガハラヤマの東。御巢鷹山はずっと北だ」と言う。「ここは御巢鷹山ではないんですね」と念押しすると、ほかの1人が「この辺りのあちこちを、御巢鷹山と呼ぶ」と曖昧

なことを言う。昔から献上鷹や矢羽根の採取を目的に鷹を捕獲する

活動報告

総務委員会

新入会員のオリエンテーションを開催

9月3日、東京市ヶ谷のルームでの説明会とオンラインの併用で、新入会員向けの令和5年度の日本山岳会オリエンテーションが開催された。対象となる2022年7月～23年6月末までの新規入会者は262名（準会員から正会員への移行を含む）で、そのうちルームでは17名、オンラインは76名（委員会・同好会関係者含む）の参加となった。

冒頭、橋本会長から会員に向けて、「日本山岳会は人が全てである」「なんらかに関わりを持ちながら、支部や委員会、そして同好会などでも活動を行なってほし

場所だったと言う。《以下次号》

（会員番号9634）

告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

い」との挨拶をいただき、それを受ける形で、平川常務理事から、各人のクラブへの参画の仕方についての具体的なアドバイスがあった。

説明会に足を運んだ17名について、1人ずつ入会理由と抱負を語る時間もあり、当会の説明だけではなく、新入会員の抱負も伺える時間となった。後半では、新入会員の参加を希望する委員会や同好会から、それぞれの活動の特色などについて説明と勧誘が。また柏さんから、携帯でルームの案内をライブで行ないながら、見学する趣向を凝らしたオリエンとなった。新しい会員の皆さんの、今後の山岳会での山行や、充実したクラブライフをお祈りしたい。

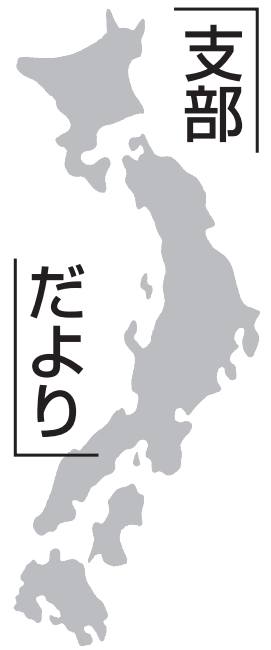
（奥田有恒）

図書受入報告（2023年8月）

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
神長幹雄	山は輝いていた：登る表現者たち十三人の断章	304p/16cm	新潮文庫	2023	出版社寄贈
木村和也	山歩みち：山への一步を踏み出す小冊子44	47p/21cm	フィールド&マウンテン	2023	出版社寄贈

支部

だより



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

越後支部

高頭祭とたいまつ登山祭に初参加して

昨年、越後支部に入会させていただき、初めての高頭祭とたいまつ登山に誘われて、物見遊山的に参加してみようかと考えた。しかし、参加してみると登山界の由緒正しい伝統ある行事であった。登山初心者には場違いかなと思ったが、非常に印象深い出来事だった。

7月25日午前10時から弥彦山スカイラインの大平園地登山口から高頭仁兵衛翁寿像のある会場までの登山道の草刈りから参加。梅雨明けの酷暑の中での作業だったが、身体的にはへとへとになったが、支部の人たちと協力することでチームワークの大切さを学んだ。

高頭祭は、日本山岳会創設メンバーの高頭仁兵衛翁の遺徳を偲ぶ行事だ。越後支部恒例で今年第66



弥彦本山での参加者の集合写真

回となり、毎年、大平園地の寿像碑前で開催されている。午後2時30分からの会式宣言で始まり、後藤支部長の挨拶ののちに来賓と参加者全員が献花を行ない、お酒が好きだったと言われる翁のレリーフに女性陣が献酒を行なうなどユニークな式典だった。終了後に記念講演で、坂井広志・前副会長が「創立120周年記念事業引き継がれる山岳祭プロジェクト」につ

いて話があった。上高地のウエストン祭をはじめ、各支部で実施している山岳祭行事の紹介があり、ウエストン祭は全国各地でも実施されているんだな、と思いながら聞こうちに、若かりしころに読んだ本で知る横有恒氏の名前が付いた山岳祭もあるとのことで、昔の本の記憶が感慨深く蘇った。

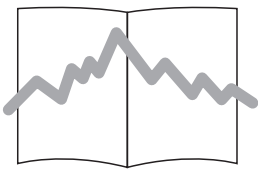
高頭祭終了後、たいまつ登山のため弥彦本山へ移動し、奥の院の安全登山祈願祭で神官の祝詞。終了後の山頂講演は、越後支部会員でもある遠藤俊一さんから「日本三百名山あれこれ」の話があり、三百名山登頂の苦労話を興味深く聞いた。日本海に夕日が沈む夕方6時過ぎより、たいまつを掲げて登山道を下り、弥彦神社を目指して出発。登山口の旧茶屋付近でたいまつを交換し、ボイススカウトの鼓笛隊を先頭とする隊列に組み直

して弥彦神社境内まで行進。山頂奥の院からの御神火を神社に届け、宮司から挨拶をいただいた。

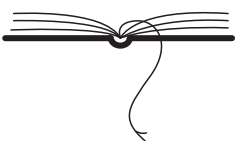
神社参拝後も鼓笛隊の先導で参道を通り、神輿担ぎでにぎわう街中へ繰り出した所で、スターマインの花火が上がり、夜空を見ながら弥彦駅まで行進した。厳肅で気持ちいを新たにすると幻想的な経験をする事ができた。このすばらしいたいまつ登山を計画準備していただいたのは、越後支部理事で地元弥彦山岳会・小林頼雄会長はじめ多くの協力者の方々とのこと。

入会間もない私が支部伝統の盛大な行事に参加することができ、すばらしい一日を過ごさせていたいただき感謝している。このような経験をさせていただいた高頭祭やたいまつ登山祭が、ますます発展することを祈念したい。

(越後支部・當重君枝)



図書紹介



針葉樹会編集

一橋山岳部 百年



2022年12月
一橋山岳部
B5判 222頁
1万円(送料込み)

1922年に創立された一橋大学山岳部の百年誌である。大学山岳部の周年記念誌という、先輩方が文章を寄せ、登攀記録が収められる形が一般的であるが、この百年誌は「写真集」である。まるでアルバムを見ている感覚だが、500枚を超える各時代の写真をよくこれだけ集めたものだと思う。中には大町山岳博物館などから借用した写真もあるが、それは取りも直さず日本の山岳史上、活躍した岳人を輩出してきたことの証左である。

本書の構成は、4つの期間から成る。

第Ⅰ期1922～45年（創部から終戦まで）

第Ⅱ期1946～67年（終戦直後からヒンズー・クシュ遠征まで）

第Ⅲ期1968～91年（ポスト遠征から体育会離脱まで）

第Ⅳ期1992～2022年（存続の危機から現在まで）

創部は慶応や早稲田より後発であるが、海外遠征も含め、登山史上、記録に残る実績も多い。北岳バットレスや鹿島槍ヶ岳・荒沢奥壁といえ、岩登りで伝説的な人物の小谷部全助たちの時代の記録である。アンデス遠征など早期から海外にも目を向けていた。1969年のエベレスト南西壁偵察隊には隊員として中島寛、佐藤之敏の2人が参加している。また、日本山岳会で活躍された方も多く、吉沢一郎、望月達夫、中島寛、山本健一郎など錚々たる方々が歴史をつくってきた。そして今、ヒマラヤと言えば第一人者の中村保氏がいる。

輝かしい記録の一方で、残念な事故も起きている。ヒンズー・クシュ遠征後、新しいステージへ進むと期待された時期に、鹿島槍ヶ岳や甲斐駒ヶ岳などでの遭難事故があり、体育会から離脱した。部員がほとんどおらず合宿もできない2000年代を経てようやく今、山岳部としての態勢が復活してきた。こうして今、コロナも克服して新世紀を歩み始め、次なる峰を

目指していると云ったらよいだろうか。

それぞれの時代の活動記録写真をベースに、集合写真、スナップ写真を織り交ぜ、途中、コラム的に山用具やウェアの変遷、海外遠征、などを挿入し、読み物としても良くできていて飽きることがない。OBに限らず、だれでも自分の時代の写真を見れば懐かしく感じるのだらう。創部から間もない時期の登攀の姿やスナップ的なものなどが残っているのは、「各年代に必ず写真好きがいたから」とのこと。

簡潔ながらキャプションを読めば連綿と続く山岳部の歴史が良く理解できる。集合写真のキャプションを書くに当たっては、顔と名前が分かる先輩に見て貰ったというから、編集作業も大変であったと思う。これはOBの針葉樹会の協力なしには叶わなかったことで、その結末の強さも感じられる。巻末には年譜と在籍者一覧も掲載され、貴重な記録となっている。こうしたビジュアルに訴える百年誌の先駆けとなるかもしれない

（荒井正人）

消えた冒険家

ローマン・ダイアル著
村井理子訳



2023年4月
亜紀書房
四六判 488頁
2500円＋税

消えた冒険家は、著者の息子ローマン2世のことである。

著者は、元ナショナル・ジオグラフィック専属の冒険家で、今は大学教授だ。生物学者として世界各地を探検して歩く旅へは息子も連れていった。息子は、父親のあとを追って成長してきたのだ。そして自立していく。やがて息子は、父親がやっていたような冒険にもチャレンジするようになり、ある意味父親を超えていく。そして突然、音信が途絶えるのだ。

この本は、前半は著者自身や息子とともに経験した冒険の数々。そして成長したローマン2世自身の冒険の紹介だ。彼は最終目的の前に、コスタリカのコルコバード国立公園を探検し、5日の計画で戻ることをメールに書いて父親へ送っている。

しかし、父親はメールをよく読んでいなかった。2週間経っても連絡がないので不審に思い、メールを見たら、5日で帰る予定になっていることに初めて気づいたのだ。もう10日も音信不通だったことに愕然とする。

両親はすぐにコスタリカへ向かう。対応した政府機関の担当者は、ローマン2世を麻薬やドラッグにも手を出す無軌道な若者と決めつけて、自ら連絡を寄こさないで遊び歩いているか、犯罪に巻き込まれたと考え、搜索に熱心ではない。

息子はそのような若者ではないと父親は主張するが、なかなかそれは受け入れてもらえない。だからこそ、この本は、前半の部分が必要だったのだ。それを読んできた読者は、父親の主張に共感できるはずだ。現地の政府は杓子定規な対応で、簡単に幕を引こうとする。しかも、父親が搜索しようとする。しかも、勝手に国立公園内に立ち入るのは違法だと阻止しようとするのだ。

彼は諦めない。様々な力を借りる。ただ、テレビ制作会社が搜索に加わることは、力になる反面、意に反することにもなるようだ。制

作会社は、真実には関係なく、視聴者を惹き付ける独自のシナリオを用意していたのだ。「息子はそんな若者ではない」という父親の悲痛な叫びが伝わってくる。

いろいろな人物が出てきて目撃証言やら憶測やら様々なことを言うので、父親と同様に読者も疑心暗鬼になることだろう。しかし、読み終わって、誰の言っていることが本当であり、親身になってくれたのか分かる。

搜索の結果がどのようなものかと言わない。しかし、息子を信じていた父親の心は救われる、とだけ言っておこう。(北島洋二)

牧野富太郎と、山

牧野富太郎著



2023年3月
山と溪谷社刊
文庫判 256頁
900円＋税

あいみよんの軽やかなメロディと爽やかなボイスで始まるNHKの朝ドラ「らんまん」を視るのが私の朝の日課である。『牧野日本植物図鑑』の著者であり、「日本の植

物学の父」の呼び名で一般にも知られている牧野富太郎は、1862(文久2)年、土佐の佐川生まれ。

大きな造り酒屋の跡取りという立場を捨て、小学校中退の学歴であったが、東京大学の植物学教室に出入りを許され周囲を圧倒する研究成果を発揮するも、教授との確執で出入り禁止となる。「いったいこの先どうなるのだろう」と「らんまん」の次週の展開に気を揉む毎日である。

さて、朝ドラの話はここまでとし、本書『牧野富太郎と、山』について述べてみたい。本書は牧野の数々のエッセイの中から、北海道から九州までの38ヶ所の山々での植物の調査と採取にまつわる作品を選んで北から順番に収録したものである。それにしても時代は文明開化と富国強兵。日本が大転換を迫られた時代に植物学を確立すべく早くも調査と採取を始めている。その使命感と広域なフィールドワークの実行力には驚くばかりだ。最初に登場する利尻山には1903(明治36)年8月、人足を連れ採取に向かっている。このときの原稿は日本山岳会『山岳』の第1年第2号(1906年)にも掲載さ

れている。ちなみに牧野は掲載された1906年に日本山岳会に入会している。

当時の利尻山を知る貴重な記録であるが、山登りとして綴られる通常のエッセイとは異なり、植物採取に取り組む真摯な姿と多くの高山植物との出会いが描かれている。幸いに私は高山植物に興味があり名前もある程度は知っているが、さすがに植物学の父と呼ばれるだけあって、その食欲な観察力と膨大な知識には圧倒される。

その後も訪れる山々では、出会う植物の単なる名前だけではなく、その名の由来、食べられるのか？

食べ方は？ なぜそこに生えているのか？ その地形にどのような適応したのか？ と幅広い知識があちこちにちりばめられているので、「なるほど合点！合点！」と自分の知識が増えていくのが楽しい。それは同時に牧野と一緒に山旅をしている気分にもなるが、植物にあまり興味がない山々には、心地良い睡眠書になるのかもしれない。

牧野は自身のことを「私は植物の愛人としてこの世に生まれてきたように感じます。あるいは草木

の精かも知れんと自分で自分を疑う」と語っているが、ひたすらに植物学を追究する動機が「生まれながらに好きに他ならない」と述べるあたり、まんざら誇張でもないようだ。本書では、茶目つ氣たっぷりの文章も出てくるが、それは植物を愛する者にしか発想できない、牧野独特の世界であり、草木の精ゆえに表現できたことなのかもしれない。牧野の研究成果は1500種以上の新種や新品種を命

名、植物標本は本人が所蔵していた分だけでも40万枚を超えているとわれている。

この原稿が掲載されるころには「らんまん」が結末を迎えているかもしれない。果たしてどうなっているのだろうか？ 朝ドラをきっかけに植物に興味を持つ方が増えればうれしい限り。そして、本書を読めば牧野富太郎の真のすごさが分かるというものだ。

(松田宏也)



■8月の理事会は夏休みのため休会でした

ルーム目誌 8月

1日 スケッチクラブ 常務理事
会
2日 全国山岳古道調査
3日 YOUTH CLUB委員
会

7日 平日クラブ
9日 休山会 かっぱの会
15日 麗山会 沢登り同好会Ⅱ
16日 つくも会
18日 自然保護委員会
19日 日本・エクアドル友好合同
登山
21日 総務委員会
22日 00会 YOUTH CLUB
委員 平日クラブ

23日 子どもと登山委員会
24日 グレートヒマラヤトラパー
SPJ 公益法人運営委員
会

25日 緑爽会 120周年記念事
業委員会
8月来室者 164名

I N F
O R M

インフォメーション

◆いいとこ歩き遍路③愛媛・香川

山行委員会

四国八十八ヶ所1200kmを春秋4回の区切り打ちで歩きます。いいとこ歩き遍路3回目は、本堂が国宝の53番太山寺に松山観光港の高浜から歩き、御大師さまのお誕生の地である75番善通寺を経て79番天皇寺まで順打ちします。遍路用品購入はご相談ください。お遍路はどこから歩いても良いのです。初参加の方歓迎します。

日程 10月12日(木)～16日(月) 4泊
5日

会員異動

物故

鬼頭万太郎(4215) 23・7・26
大谷セツ子(9666) 23・8・23
今西芳子(12451) 23・8・2
退会

山寺義雄(5687) 山梨
曾我恒夫(10965) 宮崎

集合

12日 JR松山駅改札口9
時25分(夜行バスあるいは
前日松山泊) 松山Ⅱ高浜Ⅰ
52番太山寺Ⅰ53番円明寺
Ⅰ伊予和氣駅Ⅱ大西駅Ⅰ54
番延命寺Ⅰ55番南光坊Ⅰ
今治(泊)Ⅱ56番泰山寺Ⅰ59
番国分寺Ⅰ伊予桜井駅Ⅱ伊
予氷見駅Ⅰ63番吉祥寺Ⅰ
61番香園寺Ⅰ伊予小松(泊)
Ⅰ60番横峰寺Ⅰ伊予小松
駅Ⅱ石鎚山駅Ⅰ64番前神寺
Ⅰ石鎚山駅Ⅱ伊予三島駅Ⅰ
伊予三島(泊)Ⅰ65番三角寺

します。

別格⑭椿堂―雲辺寺ロー
プウェイ―66番雲辺寺―67

番大興寺―70番本山寺―68

番神恵院―69番観音寺―観

音寺(泊)―71番弥谷寺―75

番善通寺―76番金蔵寺―79

番天皇寺―八十場駅(解散)

歩程 1日1～6時間(やや健脚
向き)

費用 参加費2万円(通信費、写真
代など)、1日約1万円(宿

泊代はその都度精算、賽銭、

納経、昼食代)、傷害保険は

各自お掛けください。遍路

用品は約2万円。別途往復

交通費。

定員 8名(先着順)

申込み開始日 10月1日～10月10

日まで数見 直 ☎090

72044668 ☒

sanko@jac.or.jp

◆いいとこ歩き遍路④香川・高野
山 山行委員会

いいとこ歩き遍路4回目は、80

番国分寺から88番大窪寺まで。前

山おへんろ交流サロンで歩き遍路

の登録をし、女体山遍路道を登り

結願後、1番霊山寺に戻ってから

紅葉が見ごろの高野山へお参りを

日程 11月11日(土)～14日(火) 3泊

4日

集合 11日 JR高松駅改札口8

時10分

行程 高松―鬼無駅―82番根香寺

―81白峰寺―80番国分寺―

83番一宮寺―一宮町(泊)―

84番屋島寺―壇の浦―85番

八栗寺―87番長尾寺―道の

駅ながお―胎蔵峰―88番大

窪寺(泊)―1番霊山寺―徳

島港―和歌山港―和歌山駅

―天下茶屋駅―橋本駅―極

楽橋―高野山駅―普賢院

(泊)―奥ノ院―金剛峯寺

(解散)

歩程 1日1～6時間(やや健脚
向き)

費用 参加費2万円(通信費、写真
代など)、1日約1万円(宿

泊代はその都度精算、賽銭、

納経、昼食代)、傷害保険は

各自お掛けください。遍路

用品は約2万円。別途往復

交通費。

定員 8名(先着順)

申込み開始 10月2日～11月3日

まで 数見 直 ☎090

72044668 ☒

sanko@jac.or.jp

◆日帰りアルプスシリーズ第4回
皆野アルプス山行のご案内

山行委員会

昔、山岳信仰の深かった破風山

を盟主とする8峰のやせ尾根を歩

きます。

日程 10月28日(土)

集合 秩父鉄道・皆野駅改札10時

15分集合 10時23分発西

立沢行のバスに乗ります。

行程 皆野駅―秩父華厳前バス停

(華厳の滝登山口)―天狗山

―大前山(653m)―如金

峰―札立峠―破風山(62

7m)―猿岩―男体拝―前

原山(347m)―大淵登山

口―皆野駅

歩行 5時間

装備 一般登山装備

解散 皆野駅16時30分予定

費用 1000円(傷害保険料、通

信費など)当日集金

集合場所、解散場所までの往復交

通費・バス代は含みません。

定員 15名

申込み 10月10日まで ☒sanko

@jac.or.jp 山行委員会・

杉崎敬子へ。傷害保険加入

のため氏名、性別、生年月

日を。また、参加者名簿作

成のため会員番号、住所、電

話番号、携帯番号、緊急連

絡先電話番号などをお知ら

せください。

問合せ先 杉崎敬子 ☒同前 ☎

090-1996-4110

◆第29回高尾展「心に映る山々」

アルパインフォトクラブ

国内外で撮影の2022年度作

品展を高尾で展示します。高尾山

にお出掛けの折はぜひお立ち寄り

ください。

会期 10月8日(日)～12日(木) 8時

～17時 最終日は13時終了

会場 東京都・TAKA O599

MUSEUM ☎042-

665-6688

◆第30回展「心に映る山々」

アルパインフォトクラブ

2023年度本展を左記の日程

で開催します。本年度は当クラブ

の写真展が30回目を迎える記念す

べき年に当たります。見てたえの

ある作品や、過去30回を振り返っ

た展示などを予定していますので、

ぜひお立ち寄りください。

会期 12月7日(木)～13日(木) 10時

～18時 土日は11時から、
最終日は15時終了

会場 「ポルトレートギャラリー」

東京都新宿区四谷1-7-12

日本写真会館5階 JR

四ツ谷駅・東京メトロ丸ノ

内線・南北線 徒歩3分

TEL 03-33651-3002

URL: <http://www.shabunkyo.or.jp>

問合せ 田口克彦 taguchi@mv.biglobe.ne.jp

034-2003 花澤廣

巳 hazwa-hirumi@xg8.so-net.ne.jp

09090782

7-0155

◆自然保護講演会 参加者募集

東京多摩支部自然保護委員会

●「日本の山岳古道120選」
を会員限定でテストサイトを
公開します。



<https://kodo.jac1.or.jp/>
ID: kodo120
パスワード:
P8w87veDYv7M

演題 山と温暖化(氷河、雷鳥、シ

カ食害)

講師 日本環境ジャーナリストの

会理事・岡山泰史氏

日時 10月26日(木)18時30分～

場所 立川市女性総合センター5

F第3学習室

定員 60名(先着)

参加費 500円(資料代ほか)

申込み Eメール、Faxに参加

者全員の氏名、住所を明記

してください。

申込み 10月20日(金)までに、日本

山岳会東京多摩支部 自然

保護委員会 河野悠二

TEL & Fax 042-1544-

4738 kyuuji@mw.biglobe.ne.jp

biglobe.ne.jp

◆初冬の上高地わくわく探訪

上高地クラブ

交通が途絶する前の、上高地ジ

オパーク巡検です。講師を原山智

先生にお願いしました。今回は山

研が冬支度で使用できず、公園活

動ステーションを利用します。

期日 11月10日(金)～13日(月) 参加

期間自由

日程 10日～12時上高地集合後、

徳沢方面へ 11日～大正池

方面へ 12日～明神、徳沢

方面へ 13日～希望者のイ

ンタープリター活動 午後

解散

定員 先着12名。会員に限らずど

なたでも参加できます

参加費 宿泊費と講師謝礼

1泊1万4000円 2

泊2万7000円 3泊

3万2000円 交通費

と昼食代は含みません(直

前キャンセルは5000

円)

申込み zero@qb3.so-net.ne.jp

◆千葉潔(山岳画)展

会場 上高地温泉ホテル ギャラ

リーきそう 〒390-1

516 松本市安曇上高地

TEL 0263-9512311

期日 9月26日(火)～10月29日(日)

訂正

本会報7月号9ページ3段目、
「第77回ウエストン祭」の記事中、
「マナスル第1次隊長は松方三郎
が務め……」とありますが、「三田
幸夫隊長」の間違いです。お詫びか
たがた訂正させていただきます。

〈会報編集委員会〉

◆編集後記◆

●9月アタマは、千葉支部の皆さ
んと一緒に燕山荘と燕岳に行つて
きました。燕山荘は山岳雑誌のア
ンケートで「いちばん良かった山
小屋」の1位に選ばれたことがあ
るほど人気が高く、実際、平日で
したが多くの登山者が合戦尾根を
上り下りしており、しかもその年
齢層の広さに感心しました。

●実は「中高年登山ブーム」のきつ
かけは、「最近、山で中高年が多く
なったけど、彼らのためのアドバ
イス本がない。なんとかならない
か」という、燕山荘のオーナー・赤
沼健至さんからの1本の電話でし
た。そこで生まれたのが『中年から
の山歩き入門』(栗林一路著)です。
あれから四十余年、登山者層の変
化は大きく、真に感慨深いものが
あります。

(節田重節)

日本山岳会会報 山 940号

2023年(令和5年)9月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社